

令和4年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
(知的障害に対する通級による指導についての実践研究)

成果報告書

受託団体名
狛江市教育委員会

1. 研究のテーマ

知的障害に対する通級による指導についての実践研究

2. 研究の名称

令和4年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
(知的障害に対する通級による指導についての実践研究)

3. 研究代表者

氏名	所属	役職
荒川 元邦	狛江市立狛江第三小学校	校長

4. 事業の実績

(1) 研究の目的

研究の目的

本市では、特別支援学級の入級判定基準を整え、知的障害のある児童に対して明確に判定を出している。しかし、知的障害特別支援学級の判定が出されていても、保護者が通常の学級への在籍を希望されることがあり、その場合には障害種別が異なるため、制度上、情緒障害の通級による指導を受けることができない。そのため、知的障害特別支援学級における支援と通常

の学級における支援の間の「支援の狭間」にいる児童が一定数存在している状況がある。

連続性のある多様な学びの場の保障が求められている中で、全ての学校に知的障害特別支援学級と自閉症・情緒障害特別支援学級が設置されていないこと、また知的障害が通級による指導の対象となっていないことは課題であるが、現時点では知的障害の境界域知能の児童に対しての有効な教育的な政策はなく、通常の学級内で学級担任が個の対応に追われ、孤軍奮闘している状況が続いている。

本研究の目的は、昨年度に引き続き通常の学級に在籍している知的障害のある児童に対して、3つの理念「強みを生かす教育」「人の重なりのある支援」「本人中心の支援」の具現化を図る。児童の個性を引き出し、学校や社会で活かせる能力を伸ばす指導を行うことで、児童の自尊感情を育み、日常生活での適応度を高め、自分らしく心豊かに生活できるようにする支援の充実を目指す。

(2) 取組内容

(1) 対象とする児童について

本事業における知的障害の捉えは医学診断の有無ではなく、本市教育委員会の就学相談における教育的な措置判断により知的障害特別支援学級相当の判定が出ていることを、本市教育委員会と本校で協議の上定めた。

また、児童本人、保護者に本研究の趣旨を説明し、研究協力に同意を得た者に対するのみ、指導を行った。

A児 新1年生。新規の対象児童候補である。就学前の引継情報から対象児童として選定した。通常の学級における個の支援を必要としており、通級による指導の自立活動の視点で支援を行うことで、安心して小学校生活を送ることができるよう丁寧に説明を行ってきた。年度始めに、本人、保護者へ研究協力依頼を行い、同意が得られたことで対象児童とした。

B児 新2年生。2年目継続の対象児童である。指導前、学校生活のあらゆる面において個別の支援が必要なため、毎日、保護者が学級内に付き添いサポートを行ってきた。生活習慣が定着していなかったため、自分の身の回りのことから自立する力を高めてきた。経験したことのないことへの不安が強く活動が滞ることが多いため、スモールステップで指導を進め、経験を積ませてきた。また、言葉でのやりとりが拙く、子ども同士のかかわりがもてないため、支援者が間に入ることで、子ども同士のかかわりや活動を共有する経験を積ませることができた。年間を通して基本的な言葉のやりとりや、日常生活をスムーズに送ることができるよう支援を行い、自立への力を高めてきた。

C児 新2年生。2年目継続の対象児童である。学習や行動のペースがゆっくりなため、集団から遅れることが多く、常時、個別の声かけや支援を必要とする。相手を意識した挨拶や返事など、対人コミュニケーションの基本となるスキルが身に付きにくく、抽象的な言葉

の理解や、聴覚的な指示の理解ができないため、学級担任は、具体的かつ視覚的、簡潔な指示を行ってきた。本児の学び方に合う学習支援や、集団から遅れそうなときや困った時の対処法の習得、語彙を伸ばす指導など、本児の発達の側面に着目し、生活への意欲を高める指導を行ってきた。特に、発達特性の凸凹が大きいことによる学習面の困難さが大きいため、取り出し型の指導と合わせて、定期的に入り込み型の指導や、教育サポーターの支援を行うことで、学習理解度を高め、意欲的に学習に向かう姿勢を身に付けてきた。

(2) 個別の指導計画の作成、通級による指導の内容の検討について

現在の通常の学級に在籍する児童を対象とした個別の指導計画が、公立小中学校において、機能的に活用されることが望まれている。。通常の学級において特別支援教育の対象となる児童は増えているが、作成した個別の指導計画を、有効に活用していく必要がある。

公立小学校における特別支援教育は、児童本人の年齢が低いことを理由に、本人の意向は十分に反映できず、保護者や教師の困りにより通級による指導の内容が決定され、指導が開始されることがある。

本人中心の支援を実現することは、本人の言葉や心理面を重視する支援を行うことになり、本人の内面の成長を促すことが期待される。そこで本研究では、個別の指導計画作成につながる「児童参加型の会議」を実施した。児童本人が中心となり、子ども自身が自分の強みと困難さを本人に合った方法で、できる範囲で自己理解した上で、児童、保護者、学級担任、通級担当、特別支援教育コーディネーター、専門家らが定期的に関わり合い、児童本人の願いの実現にむけた応援会議を実施した。児童参加型の会議後、毎週の通級指導で「自分のめあて」を考え、めあての実行、実現に向けた「学びプラン」を設定することにより課題の解決につなげられると考えた。

通級による指導の内容としては、本実践研究では、次の三つの柱を中心に指導を構成し実施した。

1 「強み」に関する指導内容

自立活動の指導は、自分の強みを知ることを通して自己理解を図り、不都合な課題とも向き合えるようになることを目指した。他者から見た児童の苦手さや困難さにばかり着目せず、本人自身から湧き出る興味関心の高いものや得意な面に着目し、指導内容や教材教具を工夫するとともに、目的が達成しやすいように、段階的な指導を行うなどして、児童の学習活動への意欲が育つよう指導した。そのために、強みのアセスメントを定期的に行い、児童の強みにつながる児童の能力や興味関心の高い分野を中心に各分野の専門家の協力を得て、プログラミングや動画編集等の特別指導を実施した。また本校の強みである授業での学びツールとしてのICT機器の活用を進め、個々の学びをカスタマイズしていく取組を行った。

2 「自己理解」に関する指導内容（本人参加型会議、「学びプラン」の取組）

自己理解は、自分の好きや嫌いに関する理解を土台として、自分の適性や強みを理解し、

それらを活かしながら生活できるように支援した。将来を見据え自立と社会参画を目指し、現在の自分にとって必要なことは何かを考えながら生活していくことができるように指導した。自分の経験を相手に適切につた伝えるための「会話のキャッチボール練習」や、自分の日常生活について他者に分かりやすく伝えるための「報連相タイム」、自分の感情を言語化して日常の経験と結びつけて報告する「気持ちでビンゴ」など、自己理解や意思表示の力を高める自己理解プログラム集の作成も行った。

3 「生活」に関する指導内容（入り込み型指導）

知的障害のある児童への教育的対応は、生活の課題に沿った多様な生活経験を通して、日々の生活の質が高まるよう指導するとともに、よりよく生活を工夫していこうとする意欲が育つように指導することにある。そのため、生活に結びついた具体的な活動を学習活動の中心に据え、実際に起こり得る状況下で指導するとともに、日常生活の振り返りを丁寧に行うことで、児童の成功体験を豊富にする取組みを行った。そのために、特別な場で特別な指導を行うことの多い通級による指導と並行して、児童の主たる生活の場である通常の学級に入り込みながら、通常の学級担任と協働して支援をする入り込み型の指導を行った。また、教育サポーターを導入し、日常の生活場面における支援の充実を図った。

(3) 指導等の評価

通級による指導の客観的な効果は測定しにくく、指導の開始や終了の基準が曖昧であることが課題となっている。本研究における指導の評価は、強みのアセスメントの導入や、児童自身の振り返りによる学びの評価、標準化した検査による事前事後評価を行った。

指導の評価は、Vineland-II 適応行動尺度、SEDC 社会性情動的発達チェックリスト、Q-U テスト、WISC-IV、肯定的・否定的養育行動尺度 PNPS、強みアンケート、入り込み指導での行動観察、保護者や学級担任への聞き取りを実施した。

(3) 事業の実施日程

実施時期	実施内容
令和4年4月	第4回知的障害通級運営委員会 新年度研究計画の作成 研究協力者の選定・依頼 初回面談 取組準備 教育サポーター募集

	<p>各種アセスメント実施</p> <p>当該分野の専門家の協力を得た特別指導打診</p> <p>取り出し型の通級指導開始</p>
令和4年5月	<p>強みに関する特別指導の実施</p> <p>入り込み型の指導開始</p>
令和4年6月	<p>強みに関する特別指導の開始 強みに関する特別指導の実施</p>
令和4年7月	<p>第3回児童参加型の会議の実施</p>
令和4年8月	<p>第5回知的障害通級運営委員会</p>
令和4年9月	<p>本人と作成する学びプランの取組開始</p>
令和4年12月	<p>第6回知的障害通級運営委員会</p>
令和5年1月	<p>各種アセスメント実施</p> <p>第4回児童参加型の会議の実施</p>
令和5年2月	<p>取り出し型の通級指導の終了</p> <p>入り込み型の通級指導の終了</p> <p>強みの特別指導の終了</p>
令和5年3月	<p>教育サポーターの終了</p> <p>二年間の研究のまとめ</p> <p>報告書作成</p> <p>報告会の実施</p> <p>対象児童の次年度の支援へ引き継ぎ業務</p>

(4) 成果

(1) 個別の指導計画の作成、通級による指導の内容の検討について

1 「強み」に関する指導内容

強みを生かす指導は、強みに関するアンケートや児童本人からの希望を基に行った。特別授業は、単発で行うだけでなく複数回継続的に行った。また、通常を取り出し型の指導にて、強みに関する指導を取り入れることで、より連続性のある指導を行うことができた。

強みを生かす指導は、児童がもっている長所を引き出し、その長所を生かして苦手なことに向き合うことをねらいとしている。どのように向き合うかは、通常を取り出し型指導の時間に通級担当教員と一緒に考えた。例えば、視覚情報を基に考えることが得意な児童は、プログラミングを使って作品を作った。その作品を紹介することを通して、苦手意識のある他者と関わる力を伸ばした。また、ブロックが好きな児童は、自分でオリジナルの作品を作った。その過程で苦手意識のある問題を解決したり最後までやりきったりする力を伸ばすことができた。

強みに関する指導を受けた児童の様子は以下の通りであった。

プログラミングという視覚情報を基に考えることで苦手さが軽減され、授業中に友達と関わろうとする姿が見られた。本人が好きで得意なブロックに取り組んでいるときに、探しているタイヤがないという出来事があったが、「これはこうしたらいいんだよ。」と自ら解決策を出して教師に提案するなど、主体的に取り組んでいた。本人が好きな身体を動かす活動を取り入れることで、学習に向かうモチベーションとなるだけでなく、できたことや褒められたことで自信にもつながった。普段の学習には集中して取り組めない児童も、強みに関するプログラミング学習では夢中になって作品を作っていた。完成後、何度か作品が崩れて動かないなどのトラブルがあったが、根気よく最後に動くまで取り組むことができた。通常 of 学級では、文字がうまく書けない時に失敗感を募らせていたが、うまくいかないときにも落ち着いて対処する経験を積むことができた。

このように強みを生かした指導を行うことで、学習への苦手意識が軽減され主体性が高まる、自信が付いて他者と関わろうとする、楽しみながら学習に取り組むことができる、問題に対して自力解決しようとする、感情の表出が円滑になるなどのよい変化が見られた。

2 「自己理解」に関する指導内容（本人参加型会議、「学びプラン」の取組）

対象児童3名とも、本人参加型会議を指導前と指導後の計2回行った。場所は児童が慣れている通級指導教室で行い、時間は学級担任も参加できるように放課後に設定した。参加者は本人、保護者、学級担任、通級担当、特別支援教育コーディネーターを基本とし、座席配置も本人との関係性に配慮して設定した。通級担当が全体司会として話し合いを進め、全員が必ず発言できるようにした。また、特別支援教育コーディネーターが記録を行い、全員に見える形で会議内容を記録した。その際に、発言者の言葉をなるべくそのまま

記録するようにした。

話し合いのルールとして、「①みんなが話をする、②内容を紙に書く、③みんなの意見を否定しないでアイデアを出し合う」ことを、事前に参加者全員で確認した。また、話し合いの内容は、指導前「①本児のいいところ（よさ、強み、得意、好き、頑張り、強み）、②こまっていること（ねがい、気になっていること、身に付けてほしい力）、③目標を考える（できるようになりたいこと、やってみたいこと）、④そのための支援方法（みんなでアイデアをたくさん考える）」とした。指導後の会議では、「①1年間で成長したところ（よさ、強み、得意、好き、頑張り、強み）、②次年度に向けて心配なこと（がい、気になっていること、身に付けてほしい力）、③これからの目標（よさを生かして、困っていることに挑戦）、④これからの支援方法（みんなでアイデアをたくさん考える）」とした。

従来の支援会議であれば、本人以外の支援者のみで話し合う場であったが、そこに本人が参加することで、参加者全員が、本人に分かりやすい言葉で話すようになり、同時に全員に見えるような形で記録をすることで一つずつ内容を確認しながら会議を進めることができた。学校で頑張ること、家庭で頑張ることはそれぞれだが、声掛け等の共通する支援方法を考えることで、一貫した支援を行うことができた。また、本児のよさを全員で出し合い共有することで、自身の成長を感じるとともに、支援者から認められたと感じることができ、嬉しそうに話を聞いている姿が見られた。

支援会議では、どうしても本人の課題や困り等できていないことが話し合われることが多いが、この会議では本人のねがいを応援するための会議として行っている。そのため、“本人の声”を大切にし、本人ができていることや得意なこと、成長していることをたくさん出し合うことが重要である。

3 「生活」に関する指導内容（入り込み型の指導）

入り込み型指導は、児童の実態に合わせて週に1～2回実施した。通級担当はT2として学級に入った。距離感や話しかける頻度は在籍学級担任と相談して行うことが不可欠であった。特に事前に授業内容を確認し、対象児が困り感を抱く場面を予想して行うことは効果的であった。また、T2として学級全体の児童の支援も行うことで、担任が、対象児に個別指導を行うことが可能になった。

週に1回は必ず対象児童について情報共有を行う時間を取り、学級の様子だけでなく通級指導教室の様子も伝えながらより実態に合わせた指導を行えるようにした。また、保護者と学級担任、通級担当の三者で情報交換が行えるよう「三角ノート」を作成したり、本人参加型会議を通してそれぞれの思いを目標に反映する等、常に連携することを意識した。

対象児童だけでなく学級全体への支援として、「おたすけカード」を作成した。入り込み型指導は週に1～2回のため、学級内のすべての児童の実態を捉え、指導に当たることは困難であった。だからこそ、支援を必要とする児童が瞬時に分かるようおたすけカードを学級全体へと配布し、「分からない」の表示が出ている児童を支援することで無駄のない

動きができるよう心掛けた。「ひらがな表」や「カラーボールペ」等、対象児が学習に取り組みやすいような支援グッズは学級全体に共有することで、抵抗感なく使用することができるようにし、対象児童以外でも使いたい児童にはいつでも使えるようにした。また、対象児童が、見通しをもって行動できるように、必要なことは、番号をつけて短く書き板書した。朝や帰りの支度、体育着の着替えの仕方などは、すべてカードにして掲示したり、指示カードに好きなキャラクターのイラストを入れたりすることで、注目することができるようにした。このような支援は、対象児のみならず、学級全体の児童にとっても有効であった。

教育サポーターは、月曜日・水曜日・木曜日・金曜日の午前中に T2 として学級に入り込み型指導を行った。週の初めに対象児童が在籍する学級担任に教育サポーターの支援が必要な授業を確認し、配置を決定した。全体指示での理解が難しく、遅れてしまう児童に対しては付箋を活用し、イラスト等で伝えたり、学級全体の中で支援が必要な児童についてもらったりすることで、より対象児への支援が手厚く行えるようにした。

今回、取り出し型指導だけでなく入り込み型指導を行ったことにより、体づくりや基礎体力等を通級指導教室で身に付けたことで、少しずつ学級で集中する時間を延ばすことへつながった。また、初めてのことにに対する苦手感や不安感が強いため、学級だけでなく個別で取り組む場があったことにより、本児も安心できる場で理解を深めることができた。引き続き、周りを見たり、自分の思い通りにならない際の切り替えを通級指導教室で学んだりすることで学級で生かすことができるとよい。

(5) 課題と対応方策

- ・今後、狛江市において、知的障害通級指導教室ができるわけではない。2年間という限られた研究期間のため対象児童の支援の継続性や移行を丁寧に行っていく必要がある。
- ・通常の学級内において自立活動の指導の視点を共有するため、通級担当者による入り込み型指導は効果的だが、入り込み型指導だけでは通級指導として認められていない。そのため、通級による指導において、取り出し型指導と、入り込み型指導の連動を図り、バランスをとっていく必要がある。
- ・今後も、通常の学級における個の支援の充実のための教育サポーター制度を確立していくことが望ましい。

5. 実施体制

担当者氏名	所属・役職等	具体的な役割
星山 麻木	明星大学教育学部教育学科 教授	外部専門家 研究統括者
野口 晃菜	国土舘大学 非常勤講師	外部専門家 研究助言者
高橋 幾	早稲田大学 大学院	外部専門家 研究助言者

荒川 元邦	狛江第三小学校 校長	研究代表者
秦 弘行	狛江第三小学校 副校長	研究の連絡調整
角田 恒一	狛江市教育委員会 統括指導主事	事務局担当・連絡担当者
平井 政知	狛江市教育委員会 指導主事	事務局担当者
森村 美和子	狛江第三小学校 指導教諭 自閉症・情緒障害特別支援学級	研究主任
岡田 克己	狛江第三小学校 教諭 自閉症・情緒障害特別支援学級	研究の企画、報告書作成、外部講師連絡担当者
御幡 友香	狛江第三小学校 主任教諭 特別支援教室担当	特別支援教室主任
直井 大明	狛江第三小学校 主任教諭 特別支援教室担当	指導担当者
林 小織	狛江第三小学校 教諭 特別支援教室担当	指導担当者
天坂 誠	狛江第三小学校 教諭 特別支援教室担当	外部講師連携担当者
平井 敬之	狛江第三小学校 教諭 特別支援教室担当	会計担当者
矢島 直緒	狛江第三小学校 教諭 特別支援教室担当	記録担当者